

第2回ぶんぱくあり方検討会まとめ

1 ぶんぱく建設の経緯について

- ・かなり早い 1988 年に「文化創造都市」という言葉を使って大きなことを考えていたことがわかる。館の役割として、「郷土資料館」と「文化創造の発信基地」の2つの役割の間に 30 年以上運営されてきた。今にふさわしいミッションが必要だろう。
- ・公民館、コミュニティセンターとぶんぱくとの関わりはどうなっているか。博物館機能と公民館機能や図書館機能が一体となって整備されているケースがあるので、明石市の社会教育施設の全体図を確認したい。

2 ぶんぱく職員意見交換会について

- ・出てきた意見で目立つのは「子ども」「身近」という存在だ。彼らはこの博物館がもっとメジャーになって、明石市民に親しまれるものになってほしいという思いをすごく強く持っていると感じる。
- ・一方で、研究に関わるテーマで出てきたものは少なかった。紀要をちゃんと作っていかなくやいけない、きちんと誇りを持って研究を進めていきたい、という意見も出ていることはすごく大事なことです。インサイドワークになるような研究や資料整理は大事と思っていても言葉として出てきにくい傾向があるので、後でもう1回ヒアリングをするなどで補っていかねばならない要素だと思う。
- ・20 年 30 年後を見越した教育をしなくてはいけない点で、文化施設の運営と大学の経営が似ているところがあると感じている。その時々に応じて専門性や職員を入れ替える必要がある。
- ・ぶんぱくでは、学芸員の専門性が固定されている印象があるが、これからの博物館のあり方を考えるなかで、それにふさわしい専門性を持つ学芸員の配置も必要になるのではないかな。
- ・現場で直面している方々が何をやりたいのか、どう思っているのかが一番大事なところだと思う。
- ・よくある意見がやっぱり出てきたと思う。ここからじゃあ何がしたいのか、本当はこうやりたいんだというところがもうちょっと出せるように、次のステップで個々の胸の内、こういう固い場じゃなくても、ちゃんとその自分の気持ちを出せるような議論が次で期待できたらいい。
- ・今回の意見交換は、現在の条例がベースなので、文化というものや文化博物館の守備範囲がちょっとぼやっとしている。でも、広く地域総合博物館みたいな感じになるのか、専門の博物館になるのか、はちょっと考えないといけない、という意見が出ていた。これから我々も議論をしていくが、現場、市民の方々、市長、皆さんの間でキャッチボールが回っていく中で、少しずつミッションが

固まってくると思う。

- ・博物館には現有の資料があるため、過去を切り捨てることはできない。そのため、分野のある程度の継続性は博物館にとって大事になる。
- ・どういう問題意識が現場にあってということが聞きたい。それが見えないまま、あり方の検討はできない。

3 本のまちビジョン検討委員会の報告

・今年この「本のまちビジョン検討委員会」では、これまでの図書館行政を第一段階とすれば第二段階を、モノとしての本をいろいろな形で目にする場所はまちなかにできたが、それだけではなく、そこからまた始まる、広がるものがまちの中にどういう形で作られていくのかということを話している。例えば、本には磁力みたいなものがある、人と人を、人と知識をつなげることもある。いろんなものをつないでいくものとして本はあるので、本からつながることをテーマにしている。

パブリック空間を作っている民間、行政、いろんなセクターの人たちが緩やかにつながって、みんなが一つの大きな幕の中に入り、いろんな形でつながりやすい環境を作っていくことを目指して、「本のまちづくりビジョン」を委員会で作ってきた。

・図書館も本を貸し出すだけではなく、コンセプトとしてリビング&ライブラリーという言い方をしているが、今まではライブラリーだけでよかった。そこにリビングが入ってくると、居場所であったり、空間が入ってくるので、そこも居やすい空間だったり、人が出入りしやすい場所だったり、そこから何かが創発される場所であったりということもありえるので、そういうところまで概念を広げながら本で人をつなぐということをこれから始めたいというところまで来ている。

・公共という言葉が出てきたが、図書館も、博物館も、本当の意味でのパブリックというものの意味を考える必要がある。

・図書館はデジタルメディア的な展開をするのか。明石市には、デジタルな情報発信をまちとしてどうやっていきたいという構想はあるのか。

4 ぶんぱくのビジョン・方向性について

・市長挨拶にあったように、市民が何度でも訪れたいような博物館、次世代の若い人たちが、つながっていくような博物館、また、子どもたちの想像力や探求心を引き起こすような博物館、こういったことが重要と思う。職員の意見交換会からは、市民にとって身近であるということも、重要なポイントとして出てきた。

・図書館のビジョンは、まちに対して図書館がどう貢献できるのかという割と大きな視点で語られているように思う。図書館ができることは何なのかを明らかにしている。だから、明石というまちの市民の生活に、あるいは、まちのアイデンティティに、あるいはまちの未来のために、文化博物館がどういう風な貢献ができるのか、そのために文化博物館が何を持っているのかというところが起点にならないといけない。

・明石でこの2020年代において、何が本当に必要なのか、何が足りていないのか、何が失われようとしているのか、というようなところを検討会で話せないで検討会で方向性は議論できないと思う。

・博物館が持っている資源、デジタルになっているものもなっていないものも含めて、それがどれだけあるのかがわかると、図書館でも博物館でも広げることが出来て、領域が重なってくる。何があるかが見えないから、どうしたらいいかわからない。

・図書館と博物館とはすごく組みやすいところだと思う。岐阜でも博物館と一緒にやっており、お互いをどううまく使いこなしていくかは結構大事で、表現として使いこなしていくのか、歴史に肌身として分かりやすく触れるために、という意味では非常に重要な視点だと思う。

・学校では子どもが1人1台、タブレットを持つようになった。その影響か、勤めている学校では休み時間に運動場に子どもがいなくなったが、図書室には子どもが集まる。本に触れるとか、実際に手に持って自分の目で確かめられる場所がすごく大事と思う。

・博物館も、デジタル空間の中でつながる意味はあると思うが、まちを構成している、まちの中にあるいろんなギャラリーとか公民館、コミュニティセンターなどを再認識して、再構築していくことが、本と一緒に、人と人が繋がることや、まちが人とつながっていくことになると思う。

・身近な存在になるというのがすごくキーポイントになる。例えば夏のクールスポットのように展覧会を見に行くだけでなく、涼みに行ける、何かの途中に立ち寄れる。そこで、何か新しい発見ができる。そういう場所が博物館の機能として、もっと重要になってほしい。

・天文科学館のように、そこに行けば何かワクワクするものに出会えるということの一つキーポイントに考えていけたらいい。

・私の博物館になってもらってリピーターになる。自分たちの生涯学習でも社会教育でも、その成果を発表する場に博物館がなっていくことによって、私の博物館になってくる。いろんな私の博物館のなり方があると思うが、そういうことでリピーターは作れると思う。それが多分職員さんたちの言っている身近という言葉につながるのではないかと考えている。

・博物館に行くとすごく思うのは人がいないということ。博物館には世間話や相談している人がおらず、有料スペースなので、私の場所ではないという拒否感がある。

- ・ぶんばくの1階は全てオープンスペースでいいと思う。大人が子どもと一緒にに行ける場所として1階が認識されたら、何回か行くと思う。1階は遊びに行ける場所。南入口から北に出ることができる構造なのだから、それもメリットになる。

- ・布団太鼓、漁船を移動して、1階にレストラン、カフェ、ミュージアムショップを設置し、2階に展示スペースを増やして特別展をすればよい。

5 2月2日 市民ワークショップ

- ・市民向けワークショップをやることによって、市民に博物館にまず目を向けてもらう、帰属意識を持ってもらうとか、それがあるということに誇りに持ってもらうとか、それを使ってどうしていいかということを考えるきっかけを持ってもらうとか、そっちがすごく重要な気がする。いろんな人たちに、市民に、まずは関わってもらい、エンゲージしてもらい、ということが重要と思う。

- ・ワークショップを今後も何度か開催されるなら、市民が何に興味関心を持っているかを上手く引き出す回があっても良いかもしれない。面白くてのめりこんだり、推し活など、様々な専門に入っていくきっかけは、とても単純な出会いだったりする。魅力が凝縮している場面に直観的な出会いをすることがある。そうした興味関心の内容やその出会いの在り方を参加者が自身の経験の中から出し合って行ける状況を工夫してみるとか。そこから、個人ではできない部分は何か、博物館と言う場でそれらを深めるにはどのような方向性があるか、そこで出てきたことを今後の博物館活動に繋ぎ合わせていけたら良いのではと思う。

- ・博物館だから資料があつてこう、という決めつけや従来のスタイルを超えて考えないと今の社会との乖離が生まれないか心配する。いま、人々を突き動かすきっかけみたいなものと、そういうことに対応できる斬新さと従来の豊かさ（資料や知）を育み続ける博物館を、一緒に作り上げていく、みたいな・・・そんな感じで館内外が絡み合えば良いと思う。

- ・市民向けワークショップは、検討会で構想が出てきて、具体化しようという時に、もう一回本格的にやらなければいけない。今回の市民向けワークショップはプレストの市民版みたいになると思うが、「この文化博物館をどうしていったらいいですか？」と聞くとさっきおっしゃっていたように、古い博物館をどうするのか、みたいな話になってしまうので、明石の文化とか、自然とか歴史とかそういったものを大切にしまちづくりをするのに、どういった施設が欲しいですか？という広いところから、皆さんのご意見をいただいた方が、いろんなアイデアが出てくるかもしれない。その中で、子どももわかるものでないとダメなんだよとか、歴史興味ないし、自然興味ないからまあ居心地がいい場所がほしいよ、とか。そういうことも出てくるかもしれない。

- ・市民の意見とは別に、専門家が求める明石の博物館というものもあるので、それは検討会で補わないといけないところかもしれない。

- ・アイデアやキーワードのパーツをいろんなところから拾ってきて、みんなで作っていくことがすごく大事と思う。

- ・博物館をもっと使っていこうというプレイヤーを増やさない限り、いいアイデアは出てこない。

- ・世界的に見て、博物館は、ティーンがつく年齢から利用しなくなるので、そこにターゲットを絞っているのは非常に重要だ。若者に限らず、コアなファンは、コアであるがゆえに凝り固まったミュージアム像にのっとった提案をしがちだが、そこを意識しつつ、進めていければ非常に良い。

6 全体の予定・フレーム

- ・あり方検討会の進め方について、職員の意見交換会や市民ワークショップなど、何を何回ぐらいやろうとしているのか、全体の予定が分からない。

- ・明石市の政策の中でぶんぱくの位置づけや現場の課題なども整理してほしい。

- ・検討会の後のことが気になっている。検討会はタスクフォースなので、5回ぐらいやって、みなさんの自由な意見をもらって、意見分布まではまとめられると思うが、その後に基本計画みたいなものに進んでいくのかどうか。

- ・誰でも立ち寄れるとか、博物館が持っているものは市民のものなどキーワードはたくさん出ているので、今回いただいた様々なキーワードを事務局でまとめて次回お示しする。